

調査報告

大学サッカーの指導に関する研究

前 田 秀 樹
後 藤 義 一
上 代 圭 子
小 笠 原 佑 亮

大学サッカーの指導に関する研究

前 田 秀 樹
後 藤 義 一
上 代 圭 子
小 笠 原 佑 亮

A Study of the College Football Coaching

MAEDA, Hideki
GOTO, Yoshikazu
JODAI, Keiko
OGASAWARA, Yusuke

Abstract

The purpose of this study was to determine parents' thoughts on the management of collegiate sports club activities. Results show that regardless of their children's sport performance, parents had higher expectations for children's growth than for direct benefits such as winning championships or becoming professional players. Further, parents hope that in addition to their children's physical strength and skills getting improved, their children will develop a sense of cooperation through participation in activities with their companions; this indicates the parents' preference for wanting their children to work on their practice and matches in a way suited to them while also valuing the importance of working together with their companions. They also have concerns about injuries and balancing sport with schoolwork and finances; and want children to receive guidance on what to do when they are not in their typical state and for their schoolwork. They also want the specialized instructor to provide careful guidance on improving competition skills and techniques according to the children's abilities but do not support strict guidance even if the children have a high competition record. However, if their children have reached the national level, they seem to place more importance on competing in matches at the top level than on working with others. Therefore, parents appreciate the categorization of players into teams according to individual abilities. Having a format with many teams at different levels—where everyone can participate in regular games, thus allowing an opportunity to compete at top-level matches—seems to meet the parents' wishes.

Keywords: College football, coaching, parents

目 次

1. 緒論
2. 研究方法と手順
 - 2.1 調査方法
 - 2.2 調査対象
 - 2.3 調査手順
 - 2.3.1 紙面調査
 - 2.3.2 インターネット調査
 - 2.4 分析方法
3. 結果
 - 3.1 サンプルの属性
 - 3.2 保護者の部活動への考え
 - 3.2.1 保護者として好ましいと思う活動時間
 - 3.2.2 部活動に期待すること
 - 3.2.3 保護者として子供が部活動に取り組んでいて良かったと思うこと
 - 3.2.4 部活動・クラブ活動に関する悩み
 - 3.2.5 部活動に関する要望
 - 3.2.6 部活動における環境で重要視すること
 - 3.3 保護者の部活動への考え（子供の競技成績による比較）
 - 3.3.1 保護者として好ましいと思う活動時間（子供の競技成績による比較）
 - 3.3.2 保護者として部活動に期待すること（子供の競技成績による比較）
 - 3.3.3 保護者として子供が部活動に取り組んでいて良かったと思うこと（子供の競技成績による比較）
 - 3.3.4 部活動・クラブ活動に関する悩み（子供の競技成績による比較）
 - 3.3.5 部活動に関する要望
 - 3.3.6 部活動における環境で重要視すること（子供の競技成績による比較）
4. まとめ

1. 緒 論

「米国のカレッジスポーツは、地域住民が観戦に訪れるなどプロスポーツに匹敵する人気と収入がある。スポーツが人々の身近にある環境を生み出すことに一役買っており、スポーツ大国の土台となっている（アシックス代表取締役社長CEO、尾山基）」として、早稲田大学とアシックスは2016年に提携を結んだ。アメリカの大学スポーツの統括談大であるNCAA（全米大学体育協会）は、大会の運営を行うのはもちろんのこと、放映権を中心としたスポーツビジネスを行っており、稼いだお金は加盟大学のスポーツ振興や奨学金などに活用する。したがって、アメリカにおける大学スポーツは単なる教育活動ではなく、プロスポーツに匹敵する産業のひとつなのである。

そのような中で、日本の大学のスポーツ強化はパブリシティという点でも学生募集上で相応の効果が見込まれる（アルカディア学報、No. 623）。帝国データバンク（2015）によると、箱根駅伝の結果が志願者数を左右することもある。例えば、“山の神”の活躍により2009年の第85回大会で優勝した東洋大学の志願者数（第1部）は、2008年度の5万8,109人に対し、2009年度は6万7,535人となり、前年度比16.2%増加。」したとされる。また恩田ら（2022）は、大学のスポーツ活動等での活躍は、大学入学を目指す高校生等に大学の存在を強いインパクトとして残し、ポジティブ

なイメージとなりうる要素を持っているとしており、大学スポーツをスポーツ産業として捉えた際に、大学側のマーケティングの視点からみると、運動部活動を強化する目的の1つは宣伝広告であるとも言える。

「高等教育の将来構想に関する参考資料」（文部科学省，2018）によると、日本の18歳人口は2005年には約137万人だったのに対して、2019年は約120万人にまで減少し、2040年には約88万人にまで減少すると推計されている。いわゆる「大学の2018年問題」であり、学生の取り合いになっている。そのような中で、このような大学スポーツの効果に多くの大学が気づいており、今では運動部活動においても優秀な学生の取り合いになっている。リクルート進学総研（2018）によると、重要なのは、各大学の「本学ならではの価値」は何かということであるとされており、すなわち特色を出すことが必要となっている。そして、それらを評価するのは生徒・学生本人だけではなく、現代においては保護者も重要な評価者であり、保護者の中でもとりわけ母親が受験生の大学選択に影響を与えることが明らかになっている（マイナビ，2019；リクルート，2019）。

価値、特色は大学スポーツにおいては、単に強化だけではない。部活の運営方法などでも特色を出すことが求められる。大学の経営に関しては、金子（2000）、両角（2001）、潮木（2002）平山（2004）、平塚（2007）など多々研究されている。そして、大学スポーツについても、津田（2007）、杉田（2016）、山田（2018）、伊坂・峰尾（2018）、吉田（2020）、鈴木（2020）、一ノ瀬（2022）など、多くの研究がされている。だが、大学経営の視点から、教育的視点や地域振興との関係、現状に伴った変革などを対象とした研究は散見される中で、本来の主役である学生や保護者にとっての価値に着目した研究は見受けられない。また、保護者を調査対象とした研究は皆無と言っても過言ではない。そのような中で、東京国際大学のサッカー部は、単なる学生集めではなく、特色ある運営を行っており（REALSPORTS，2023年11月1日）、学生を大切にしていると考えられる。

そこで本研究においては、東京国際大学サッカー部を事例として、大学の運動部活動の運営についての保護者の考えを明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法と手順

2.1 調査方法

本調査は、紙面調査法（直接配布・回収）とインターネットを使用した調査の両方にて行った。

2.2 調査対象

関東にある1大学のサッカー部に入部予定の学生の保護者とした。

なお、この大学の学生を対象とした理由について、この大学は所属人数が多いとともに、関東大学サッカーリーグ1部に所属するだけでなく、社会人リーグである関東サッカーリーグ、埼玉県サッカーリーグなど、多種にわたるリーグで活動し、プロサッカー選手を多数輩出している強豪大学であるためである。

2.3 調査手順

2.3.1 紙面調査

新入部員説明会に際に、出席している保護者に対して本調査の目的を説明して協力を依頼し、協力を得られた場合のみアンケート用紙に回答してもらった。なお、質問項目は先行研究を基に作成した後、有識者によって検討し決定した。

2.3.2 インターネット調査

東京国際大学サッカー部の理念や運営方法などについて詳細に記されている本研究著者の著書『東京国際大学式「勝利」と「幸福」を求めるチーム強化論』を読んでもらった後、インターネットを介して回答してもらった（Google Form使用）。なお、インターネット調査についても、新入部員説明会の際に説明を行い、同意を得た者にのみ開始してもらった。

2.4 分析方法

分析は、SPSS Statistics 29を使用し、単純集計、クロス集計およびt検定、カイ二乗検定、f検定を行った。

3. 結 果

3.1 サンプルの属性

表1は回答者（保護者）の属性である。

まず入部予定である子供との関係は、父が16.4%、母が82.1%、その他が1.5%であった。次いで、回答者の競技歴は、中学までどこかに所属してスポーツをしていた者が23.9%、高校までが53.7%、大学までが11.9%、無回答が10.4%であった。そして子供の競技の最高成績は、地区大会が6.0%、都道府県大会が37.3%、地方ブロック大会が14.9%、全国大会が26.9%、その他が9.0%、無回答が6.0%であった。

3.2 保護者の部活動への考え

3.2.1 保護者として好ましいと思う活動時間

対外試合や大会等に参加した日を除いて、1日につき保護者としてどの程度の活動時間が好まし

表 1 調査回答者の属性

		%	(n)
回答者の子供との 関係	父	16.4 %	(11)
	母	82.1 %	(55)
	その他	1.5 %	(1)
	合計	100.0 %	(67)
回答者の競技歴	中学まで	23.9 %	(16)
	高校まで	53.7 %	(36)
	大学まで	11.9 %	(8)
	無回答	10.4 %	(7)
	合計	100.0 %	(67)
回答者の子供の 競技成績	地区大会	6.0 %	(4)
	都道府県大会	37.3 %	(25)
	地方ブロック大会	14.9 %	(10)
	全国大会	26.9 %	(18)
	その他	9.0 %	(6)
	無回答	6.0 %	(4)
	合計	100.0 %	(67)

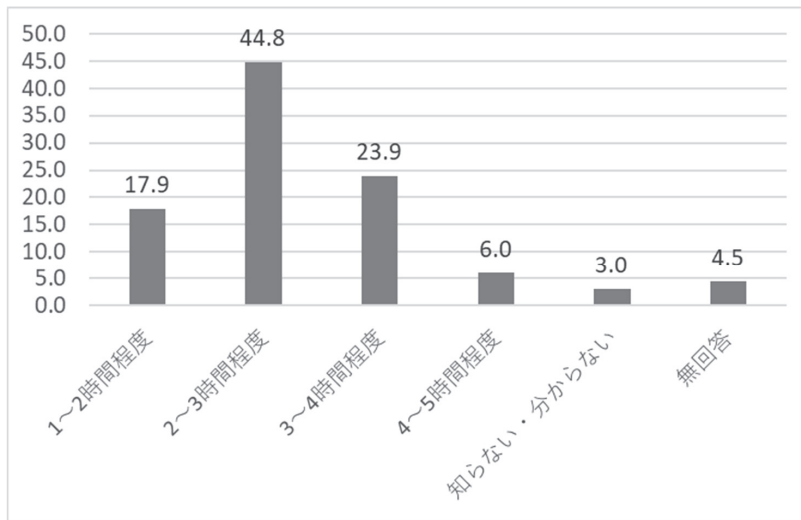


図1 保護者として好ましいと思う活動時間

いかを聞いたところ、2時間から3時間が44.8%と最も多く、次いで3時間から4時間が23.9%、1時間から2時間が17.9%と多くなっていた。したがって、試合日以外に練習時間は、2時間から3時間程度が望ましいと考えているようである。

3.2.2 部活動に期待すること

部活動に期待することを6段階評価で聞いたところ、「社会性（挨拶・礼儀等）を身につける」が5.72と最も高くなっており、次いで、「自信をつける」（5.58）、「チームワーク・協調性・共感を味わう」（5.55）と高くなっていた。逆に、「大会・コンクール等で良い成績を収める」（5.18）、「将来（プロ選手・就職）に繋がる」（5.19）と他と比較して低くなっていたことから、利害よりも子供の成長に繋がることを期待しているようである。

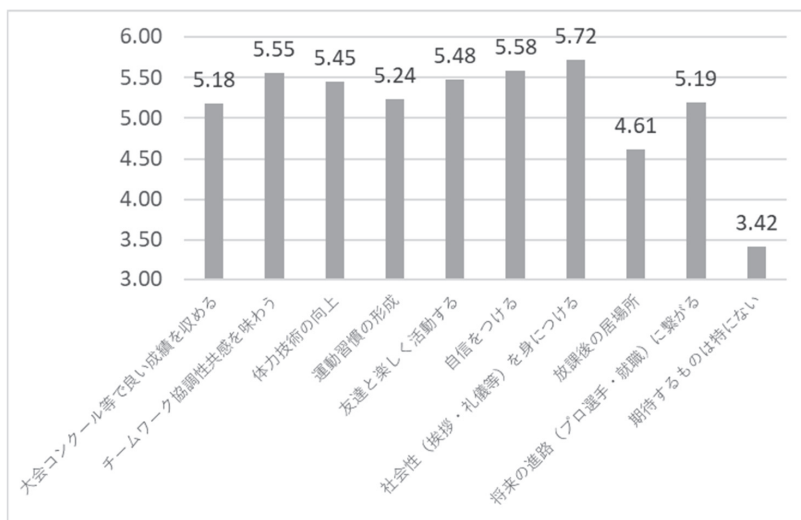


図2 部活動に期待すること

3.2.3 保護者として子供が部活動に取り組んでいて良かったと思うこと

次に、保護者として子供が部活動に取り組んでいて良かったと思うことを聞いた（図3）。

最も良かったと思うことは、「チームワークや協調性、共感を味わえている」こと（83.6%）であり、次いで、「体力や技術が向上している」こと（68.7%）,「仲間が増えた」こと（62.7%）であった。したがって、保護者はスポーツによる体力や技術の向上以外にも、仲間と活動することで、協調性などが身につくことを望んでいるようである。

3.2.4 部活動・クラブ活動に関する悩み

子供の部活動・クラブ活動に関する悩みを6段階評価で聞いた結果が図4である。

「ケガの心配」が4.12と他と比較してかなり高くなっており、次いで「学業との両立」が3.70,「お

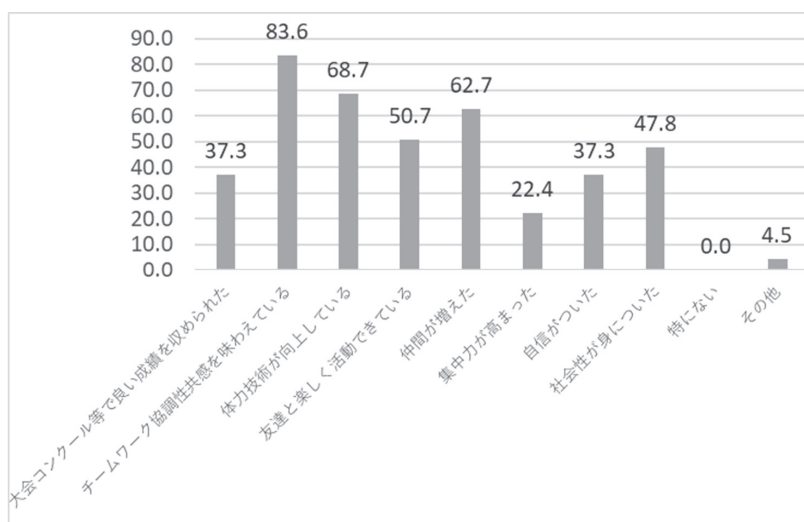


図3 保護者として子供が部活動に取り組んでいて良かったと思うこと

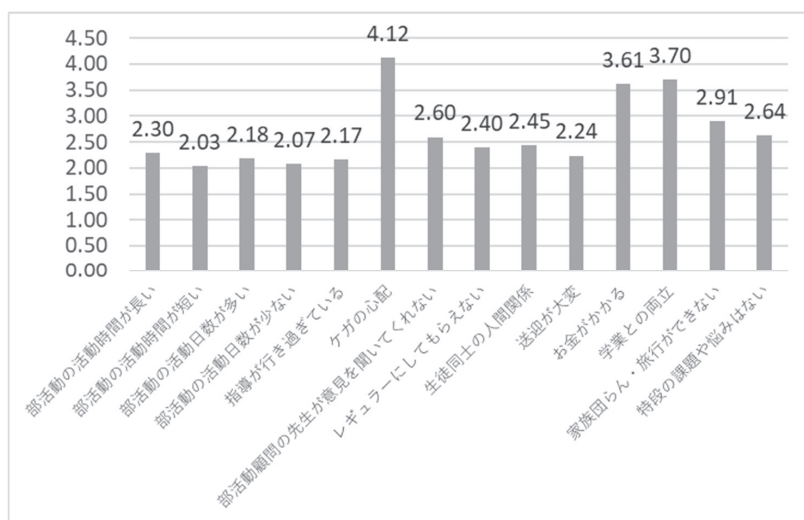


図4 部活動・クラブ活動に関する悩み

金がかかる」ことが3.61と高くなっていた。なお、他の項目については3ポイント以下であり、あまり高くなかった。

3.2.5 部活動に関する要望

部活動・クラブでの活動に関しての要望を聞いたところ、図5のような結果となった。

「専門の指導者から教えてもらいたい」が4.82と最も高く、次いで「プロを目指すような、競技力や技術の向上を中心とした活動をしてほしい」が4.64となっていた。この点について自由記述においても、「いい指導者」を重要視するコメントがあった。したがって、専門の指導者から競技力や技術の向上について指導してもらいたいと考えているようである。

また、図6のように、どの程度多く指導をして欲しいかを聞いたところ、下記のような結果となった。

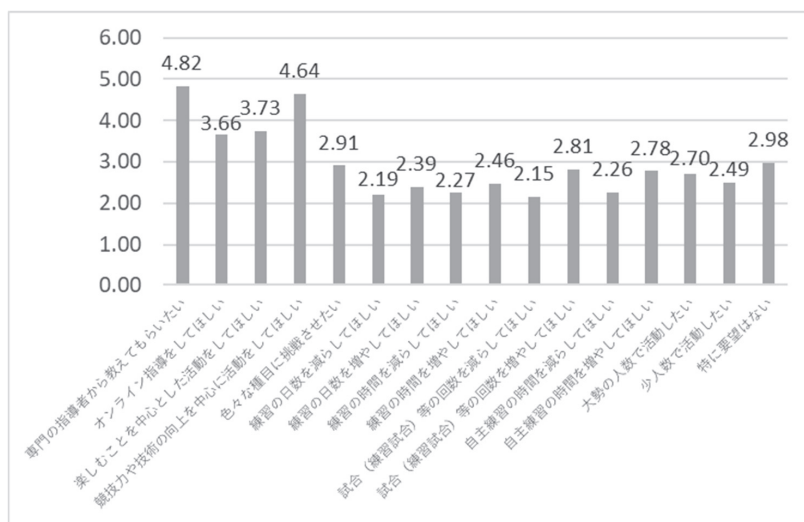


図5 部活動・クラブでの活動に関する要望

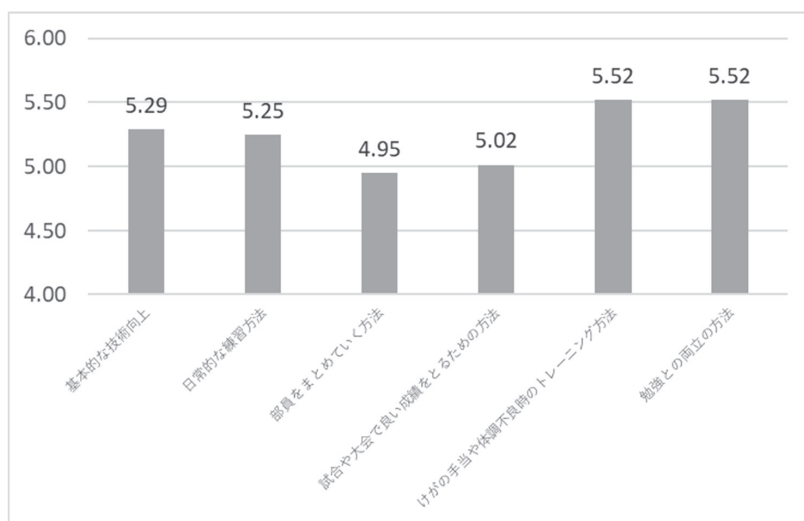


図6 指導して欲しい程度

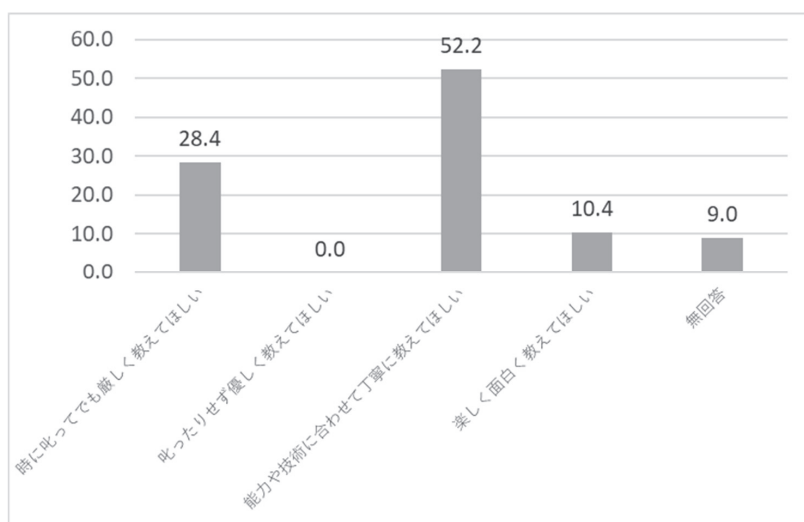


図7 部活動において望む指導方法

「けがの手当や体調不良時のトレーニング方法」と「勉強との両立の方法」が5.52と高くなっており、保護者は本調子でないときの対応と勉強について困っていることが示唆された。また、大学生からは自炊をしないてはならない環境に身を置く者も出てくることから、自由記述において「栄養指導」に対する要望もあった。

そして、部活動において望む指導方法については、図7の通り、保護者は能力に合わせた丁寧な指導を望んでいるようである。また、この点について、自由記述において、能力に合わせたカテゴリー分けを評価するコメントが多く見られた。

3.2.6 部活動における環境で重要視すること

部活動における環境について、グラフのような項目をどの程度重要視するかについて聞いた結果、図8のようになった。

「目指したい夢や目標が明確である」(5.45)、「練習などが効率よく合理的である」(5.31)、「全員が同じ熱量で取り組める」(5.20)、「違うチームでも同じ学校の部員は応援する」(5.11)、「自分のレベルに合った試合に出場できる」(5.00)が5ポイント以上と高くなっていた。この点について、自由記述においても「実力・能力に合ったカテゴリーで試合を経験出来るように多くのカテゴリーがあることが魅力」であるというコメントも多くあった。また、「楽しむこと」や「チャレンジすること」「環境の大切さ」についても書かれていた。したがって、練習や試合については自分に合った形で取り組んで欲しいと考える一方で、仲間と一体になっての取り組みも重要視しているようである。

そして、上記項目の中で、特に部活動における環境で重要視することを聞いた(図9)。

大学サッカーのトップレベルでの試合に出場できることと全員が活躍できることがそれぞれ47.8%と半数近くが重要視していた。次いで、メンバー全員に平等にチャンスがあることが38.8%と高くなっていた。したがって、この大学の、レベル別にチームを多く編成し、全てのチームが公式戦に出場することで、トップレベルの試合にも出場するチャンスを設けていることは、保護者の希望にあった形式であるようである。

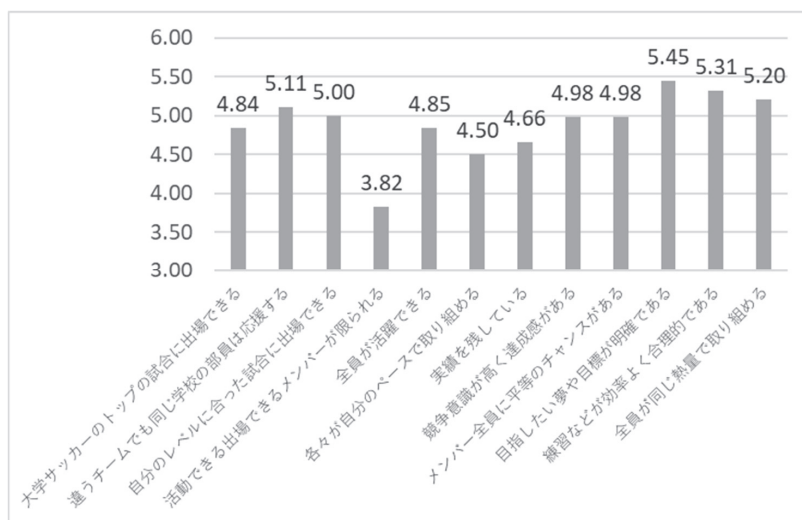


図8 部活動における環境で重要視すること

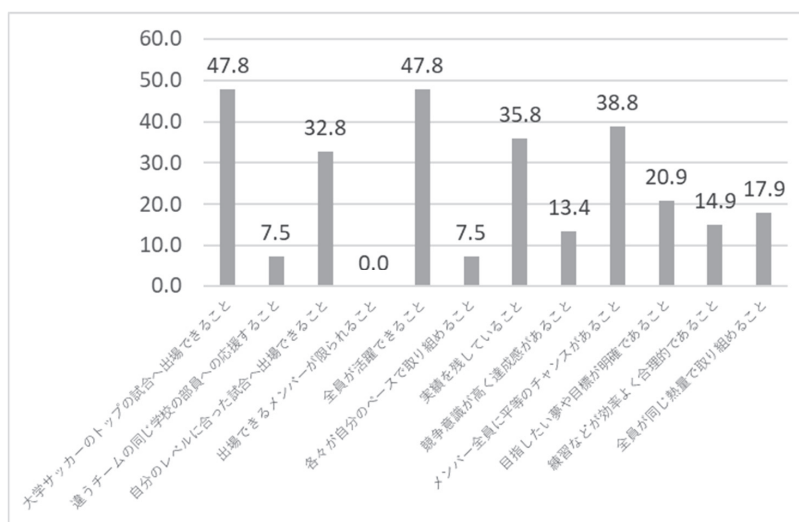


図9 部活動における環境で特に重要視すること

3.3 保護者の部活動への考え（子供の競技成績による比較）

3.3.1 保護者として好ましいと思う活動時間（子供の競技成績による比較）

図10のように、対外試合や大会等に参加した日を除いて、保護者として1日の活動時間はどの程度が好ましいと思っているかを子供の競技成績によって比較したところ、最も良い競技成績が地区大会、都道府県大会、地方ブロック大会だった子供の保護者は2時間から3時間が最も多くなっていたが、全国大会に出場している子供の保護者は3時間から4時間が最も多くなっていた。また、地区大会が最高成績の場合は2時間から3時間が75.0%、3時間から4時間が0.0%であり、都道府県大会の場合は2時間から3時間が52.0%、3時間から4時間が12.0%、地方ブロック大会の

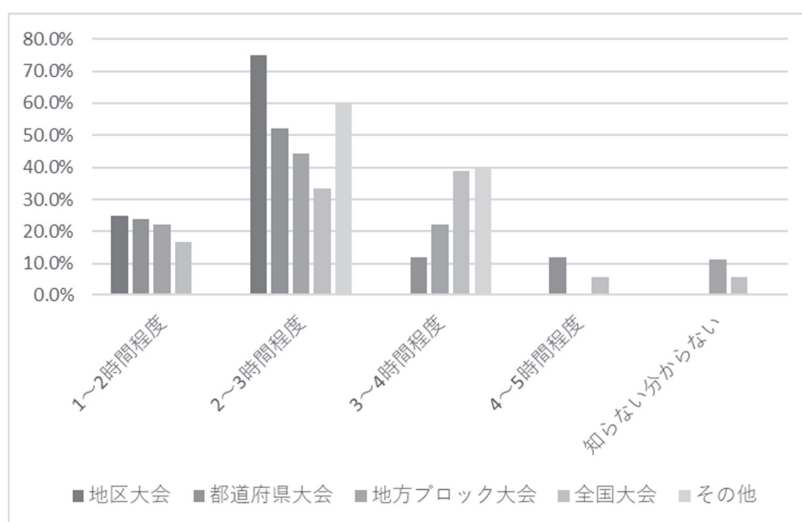


図10 保護者として好ましいと思う活動時間（子供の競技成績による比較）

場合は2時間から3時間が44.4%，3時間から4時間が22.2%であったことから，競技成績が良い程，少し長めの活動時間を好む可能性がある。

3.3.2 保護者として部活動に期待すること（子供の競技成績による比較）

また，保護者として部活動に期待することの子供の競技成績で比較した（図11）。

同じような傾向にあったが，地区大会が最高成績の場合は「自信をつける」ことが最もポイントが高くなっており，都道府県大会・地方ブロック大会の場合は「社会性（挨拶・礼儀等）を身につける」こと，全国大会の場合は，「チームワーク・協調性・共感を味わう」ことが最もポイントが高くなっていた。

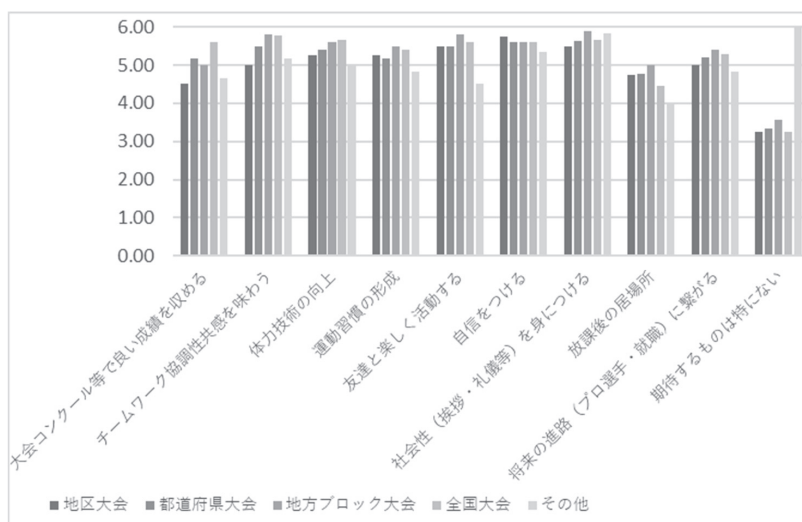


図11 保護者として部活動に期待すること（子供の競技成績による比較）

3.3.3 保護者として子供が部活動に取り組んでいて良かったと思うこと（子供の競技成績による比較）

また、保護者として子供が部活動に取り組んでいて良かったと思うことを子供の競技成績で比較した（図12）。

同じような傾向にあり、子供の競技成績に関係なく、「チームワーク・協調性・共感を味わう」ことが最もポイントが高くなっていた。

3.3.4 部活動・クラブ活動に関する悩み（子供の競技成績による比較）

子供の部活動・クラブ活動に関する悩みを比較した結果が図13である。

地区大会が最高成績の場合は「学業との両立」と「家族団らん・旅行ができない」ことが4ポイント以上と比較的高くなっており、都道府県大会の場合は「ケガの心配が4ポイント以上、全国大会

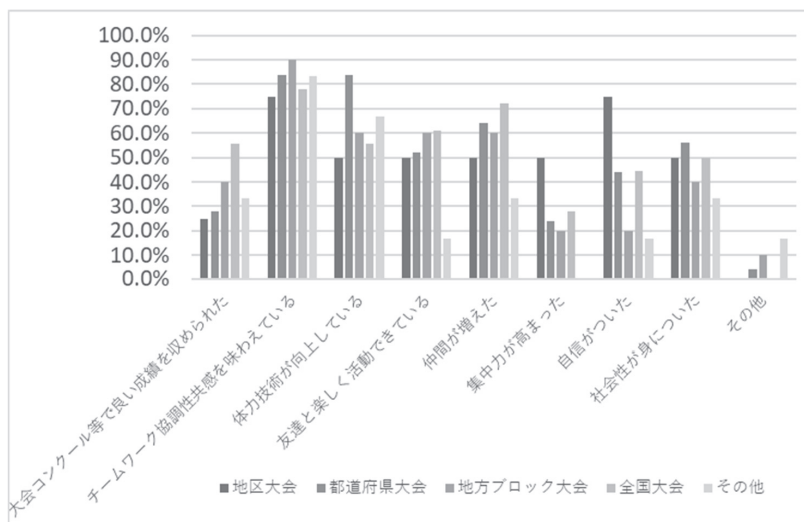


図12 保護者として子供が部活動に取り組んでいて良かったと思うこと（子供の競技成績による比較）

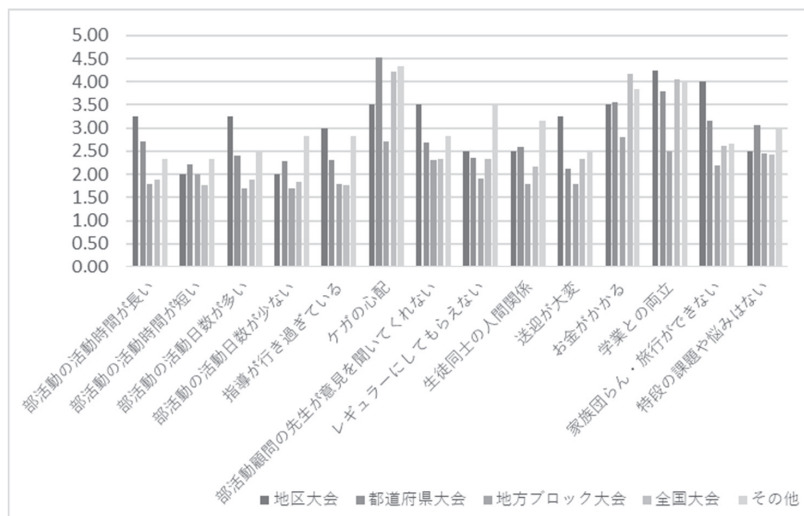


図13 部活動・クラブ活動に関する悩み（子供の競技成績による比較）

の場合は、「ケガの心配」と「お金がかかる」こと、「学業との両立」が4ポイント以上になっていたが、地方ブロック大会の場合は4ポイント以上の項目はなかった。

3.3.5 部活動に関する要望

部活動・クラブでの活動に関しての要望を比較したところ、図14のような結果となったが、子供の競技成績に関係なく「専門の指導者から教えてもらいたい」は高くなっていた。また、「競技力や技術の向上を中心に活動をしてほしい」は都道府県大会・地方ブロック大会・全国大会が最高成績の場合は4ポイント以上と高くなっていたが、初めての人でも気軽に参加できるような、楽しむことを中心とした活動をしてほしい、「色々な種目に挑戦させたい（複数の部活動やクラブに参加する等）」、「大勢の人数で活動したい」は、地区大会が最高成績の場合のみ4ポイント以上と高くなっていた。

また、図15ように、どの程度指導をして欲しいかを聞いたところ、下記のような結果となった。

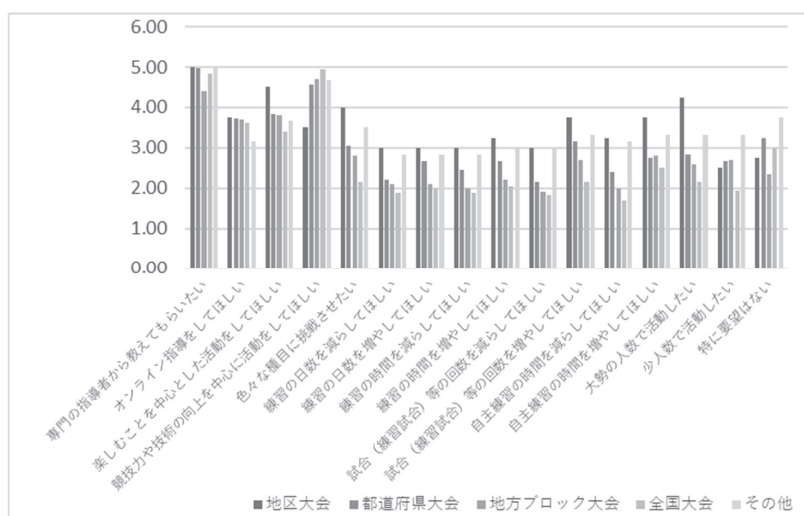


図14 部活動・クラブでの活動に関する要望（子供の競技成績による比較）

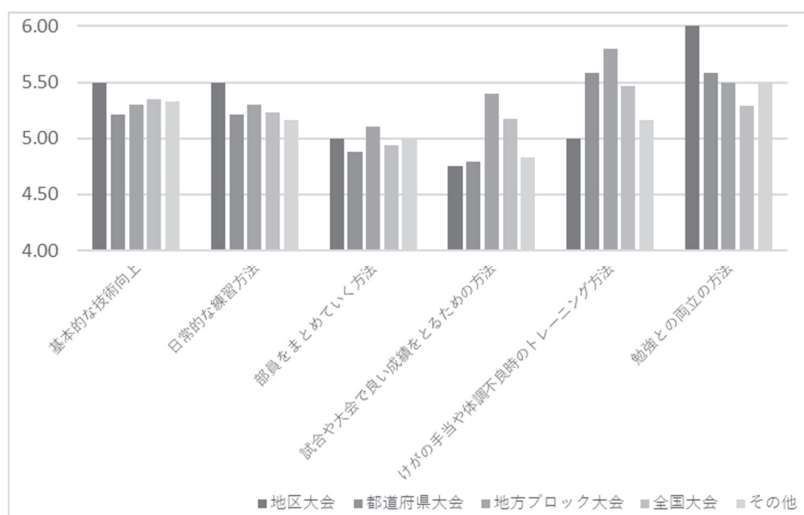


図15 指導して欲しい程度（子供の競技成績による比較）

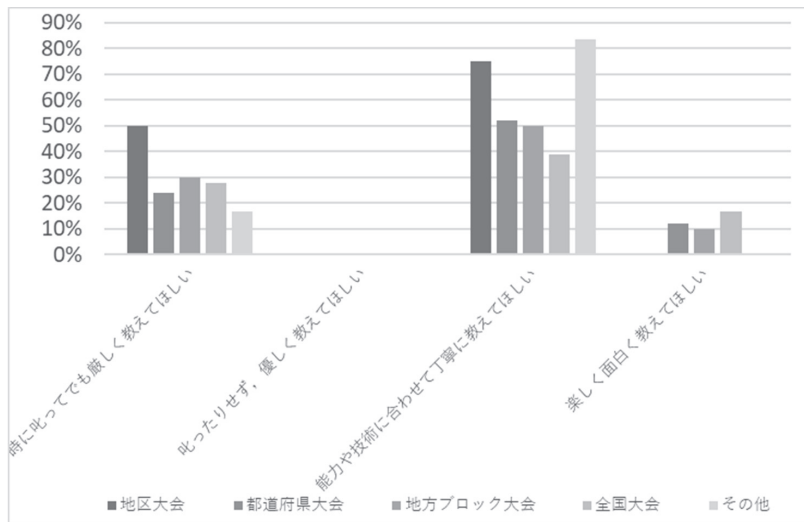


図 16 部活動において望む指導方法（子供の競技成績による比較）

「勉強との両立の方法」は地区大会・都道府県大会・地方ブロック大会が最高成績の場合に最も高くなっていた一方で、全国大会が最高成績の場合は「けがの手当や体調不良時のトレーニング方法」が最も高くなっていた（都道府県大会の場合も同じポイントで最も高くなっている）。

そして、部活動において望む指導方法について比較したが、図 16 の通り、子供の競技成績に関係なく保護者は能力に合わせた丁寧な指導を望んでいるようである。一方で、全国大会が最高成績の場合が最も厳しい指導を望んでいなかった。

3.3.6 部活動における環境で重要視すること（子供の競技成績による比較）

部活動における環境について、グラフのような項目をどの程度重要視するかと比較した結果、図 17 のようになった。

地区大会が最高成績の場合は「目指したい夢や目標が明確である」こと、「練習などが効率よく合理的である」こと、「全員が同じ熱量で取り組める」ことが高くっており、都道府県大会の場合は「目指したい夢や目標が明確である」こと、「練習などが効率よく合理的である」こと、地方ブロック大会の場合は、「目指したい夢や目標が明確である」こと、「練習などが効率よく合理的である」の他に「違うチームでも同じ学校の部員は応援する」ことが高くになっていた。そして全国大会の場合は、「目指したい夢や目標が明確である」こと、「練習などが効率よく合理的である」の他に「大学サッカー界のトップレベルの試合に出場できる」ことが高くになっている。

そして、上記項目の中で、特に部活動における環境で重要視することを聞いた（図 18）。

地区大会が最高成績の場合は「大学サッカー界のトップレベルの試合に出場できる」ことと「全員が同じ熱量で取り組める」ことが最も多く、都道府県大会の場合は「全員が同じ熱量で取り組める」こと、地方ブロック大会の場合は、「メンバー全員に平等のチャンスがある」こと、そして全国大会の場合は、「大学サッカー界のトップレベルの試合に出場できる」ことが最も高くなっている。したがって、子供の競技成績が全国大会が最高成績の場合は、全員で取り組むことよりもトップレベルでの試合に出ることを望んでいるようである。

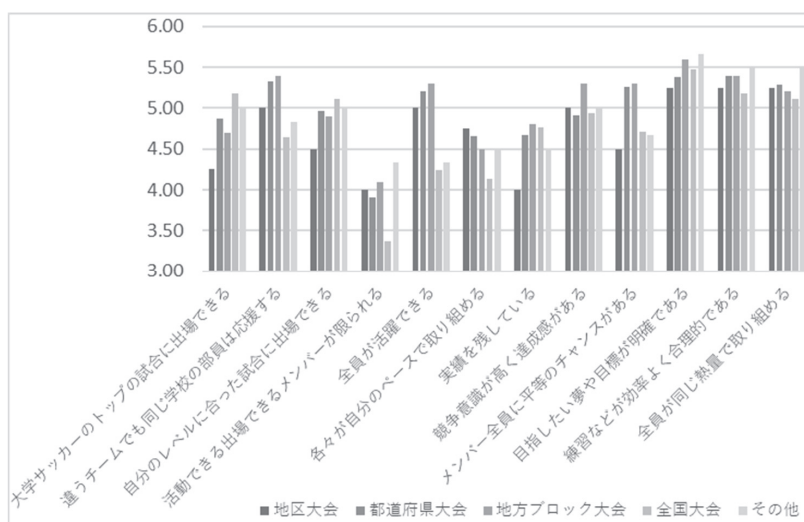


図 17 部活動における環境で重要視すること（子供の競技成績による比較）

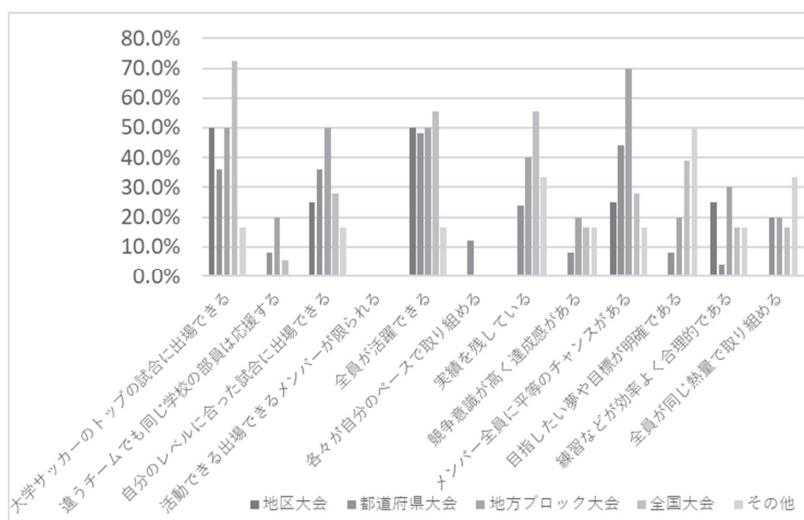


図 18 部活動における環境で特に重要視すること（子供の競技成績による比較）

4. まとめ

試合日以外の活動時間は、2時間から3時間程度が望ましいと考えているが、子供の競技成績が高い程、少し長めの活動時間を好む可能性がある。

子供の競技成績に関係なく、優勝する、プロになるといった直接的なベネフィットよりも、子供の成長に繋がることを期待している。また、体力や技術の向上以外にも、仲間と活動することで協調性などが身につくことを望んでいる。そのため、練習や試合については自分に合った形で取り組んで欲しいと考える一方で、仲間と一体になっての取り組みも重要視しているようである。

また、「ケガの心配」と「学業との両立」「お金がかかる」ことが懸念事項であることから、「けがの手当や体調不良時のトレーニング方法」と「勉強との両立の方法」など、本調子でないときの対応と学業について指導して欲しいと思っている。だが、子供の競技成績が高い程、「勉強との両立」よりも「けがの手当や体調不良時のトレーニング方法」を指導して欲しいと思っている。

そして、子供の競技成績に関係なく、「目指したい夢や目標の明確さ」、「練習などの効率や合理性」を重要視し、専門の指導者から、競技力や技術の向上について能力に合わせた丁寧な指導を望んでおり、競技成績が高くて厳しい指導を望んでいない。だが、競技成績が高くない場合は、「気軽に参加できるような楽しむことを中心とした活動」や「色々な種目への挑戦」、「大勢の人数での活動」も望んでいた。だが、子供が全国レベルである場合は、全員で取り組むことよりもトップレベルでの試合に出ることを重要視しているようである。

また、自由記述では、楽しむことや仲間との協調性、チャレンジすることの大切さ、そして大学の部活動を通じて人間として成長することへの期待が多く寄せられていた。高校時代に試合に出る機会が少なく、サッカーを続けることを諦めかけていた子供が、再びチャレンジできる環境があることを喜ぶ声も多く聞かれた。したがって、今後も選手個人だけでなく、保護者の期待にも応えられるような指導や環境づくりをしていかなければならないだろう。

したがって、能力に合わせたカテゴリー分けを評価しており、レベル別にチームを多く編成し全てのチームが公式戦に出場することで、トップレベルの試合にも出場するチャンスを設けていることは、保護者の希望にあった形式であると言える。

参考文献

- ・アルカディア学報, No. 623 「大学スポーツの課題と日本版NCAA創設の意義」 <https://www.shidaikyo.or.jp/riihe/research/623.html>
- ・平塚 力 (2007) 大学経営の研究領域に関する一考察——大学における経営プロセスの解明を意図して. 大学財務経営研究／国立大学財務・経営センター研究部 編, (4), pp. 207-229.
- ・平山 崇 (2004) 大学経営研究の現状と課題. 経済論究, 119, oo. 69-82.
- ・一ノ瀬大 (2022) 大学スポーツにおけるアスリート学生に関する研究動向：学業と競技の両立に着目して. 九州大学教育社会学研究集録, 23, pp. 37-46.
- ・伊坂忠夫・峰尾恵人 (2018) 大学スポーツ改革の視点：大学スポーツコンソーシアム KANSAI『大学スポーツの新展開——日本版 NCAA 創設と関西からの挑戦——』, pp. 16-21.
- ・金子元久 (2000) 大学評価のポリティカル・エコノミー. 高等教育研究, 3 (0), pp. 21-41.
- ・マイナビ (2019) 「マイナビ進学「進学に関する保護者の意識調査」を初めて発表」 https://www.mynavi.jp/news/2019/09/post_21332.html
- ・文部科学省 (2018) 高等教育の将来構想に関する参考資料.
- ・両角亜希子 (2001) 大学の組織・経営. 高等教育研究, 4 (0), pp. 157-176.
- ・恩田哲也, Roomy Andy, 西出仁明, 両角 速 (2022) 箱根駅伝のメディア露出と大学入学志願者数についての調査研究. 東海大学紀要, 体育学部, 49, pp. 25-32.
- ・プラスワンデジタル (2016) 「米国では盛況, 日本では? 大学スポーツはビジネスとして成り立つか」 <https://news.mynavi.jp/article/20160318-collegesports/>
- ・リクルート進学総研 (2018) 「「本学ならではの価値」の明確化が生き残りのカギに」 <https://souken.shingakunet.com/higher/2018/07/vol211jul-aug20-bad4.html>
- ・リクルート進学総研 (2019) 「第9回 高校生と保護者の進路に関する意識調査2019」 <http://souken.shingakunet.com/research/2010/07/post7a54.html>
- ・潮木守一 (2002) 市場競争下の大学経営. 高等教育研究, 5 (0), pp. 7-26.
- ・杉田文章 (2016) 大学スポーツをめぐる諸課題に関する考察. 経営・情報研究, 多摩大学研究紀要, 20,

pp. 157-160.

- 鈴木大地 (2020) 大学スポーツの振興と地域・社会の活性化. 現代の高等教育, (620), pp.4-8.
- (株) 帝国データバンク (2015) 「箱根駅伝の影響」 <https://www.tdb-di.com/2019/12/col2015010803.pdf>
- 津田忠雄 (2007) 〈特集 競技スポーツと大学教育——学生課外スポーツの現状と課題〉大学教育とスポーツ競技を通じての教育——大学生アスリートとライフスキル教育プログラムの展開. 近畿大学健康スポーツ教育センター研究紀要, 6 (1), pp.13-25.
- 山田晋三 (2018) 大学スポーツのマネジメント. 現代スポーツ評論, (39), pp. 97-106.
- 吉田卓史 (2020) UNIVAS 設立後の大学スポーツの展開に関する一考察. 福山大学経済学論集, 44, pp. 1-15.